

コロナ禍における初年次教育の工夫と キャリア形成に対する教員インタビュー動画の効果

小松 陽 介* 貝 沼 恵 美* 岡 村 治*

キーワード：初年次教育，新型コロナウイルス，インタビュー，テキストマイニング，キャリア形成

1. 2020年度に流行した新型コロナウイルス感染症の影響による授業開講形態

2020年1月以降、新型コロナウイルス感染症(COVID-19:以下、新型コロナと省略)の拡大は、世界各地で医療・教育・経済などあらゆる人間活動に影響を及ぼしてきた(2021年1月現在)。2020年4月1日までに日本の新型コロナ累積感染者数は2,502人を数え、4月7日には7都府県を対象に緊急事態宣言を発出、4月16日には新型コロナ対策の特別措置法に基づく「緊急事態宣言」が全国に拡大され(厚生労働省ホームページ;首相官邸ホームページ)、5月25日の解除に至るまで人々の行動が著しく制限された。

立正大学においても新型コロナに対する注意喚起や対応策が講じられ、大学公式ホームページや学生・教職員向けポータルサイト¹⁾などを通じ1月31日付で注意喚起文書が発出された。3月9日には「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う措置について」というメッセージの中で、2019年度卒業式・修了式の中止に引き続き、2020年度入学式の中止、新入生・新年度ガイダンスなどの行事の延期が告知された(立正大学ホームページ)。

新型コロナの影響により学部や学科の運営、とくに新入生に対するガイダンスなどの対応は困難を極めた。新入生が、ポータルサイトや電子メールの使い方を学習しておらず、最新情報を一斉連絡することができなかったためである。ビデオ配信によるオンライン形式で実施した時間制作成や学生生活に関する新入生ガイダンスを学生が欠席した場合、接続方法の理解不足、体調不良、本人の意思など、その理由を教員が把握することが難しかった。一度も新入生と顔を合わせられないまま新学期が始まることの困難さを教員は予想できなかった。

しかし、不安については新入生の方が大きかったと推測される。通常なら人見知りしがちな新入生であっても、ガイダンスや学科行事を通じて徐々に学友の輪が広がり、

同じ必修授業を受講しながら相談できる関係性を構築していく。しかし、今年度はSNSでつながりのできていた一部の新生を除けば、学生間のつながりがなかったため学生互助は機能することなく、新生は大学教職員にしか頼ることができない状況に陥った。

一方、地球環境科学部事務室などは職員の半数が在宅ワークを指示されたことで、出勤した数少ない職員の仕事を円滑に進めるために、通常であれば相談窓口として利用する電話回線を遮断し、電子メールのみの対応とせざるを得なかった。しかし、近年、電子メールを使う高校生はほとんどいないため、それを相談のツールとしたことは、実質的に新生のコミュニケーション手段を奪ってしまった可能性もある。それゆえ、教員の負担が増えたことは想像に難くない。

2020年度の授業は4月7日に開始予定であったが、コロナ禍の影響で予定が約一か月遅れた。5月13日のオンライン授業が開始以降、地理学科では1年次必修科目である「学修の基礎Ⅰ」「基礎地図学および実習Ⅰ」「情報処理の基礎」において出欠確認を特に注意深く行った。2019年度までは成績不良者や出席不足となった学生に対して担任教員が個人面談を行っていたが、前述したように欠席理由すら不明なため、一回でも欠席が確認された段階で電話連絡を実施した。その結果、1期終了段階において例年よりも履修相談を要する学生数が減少し、一定の効果が認められた。

2. フレッシュャーズ科目「学修の基礎Ⅰ」の位置付けと授業内容

本学は、「学修の基礎Ⅰ」「学修の基礎Ⅱ」を1年次必修科目とし、地球環境科学部では教養の科目の中のフレッシュャーズ科目群に位置付けられている。フレッシュャーズ科目群は5科目10単位から成っており、大学での学びを修得する「学修の基礎Ⅰ」(1期)と「学修の

* 立正大学地球環境科学部

基礎Ⅱ」（2期）のほか、情報処理全般や外国語のスキルを修得する「情報処理の基礎」「基礎英語Ⅰ」「基礎英語Ⅱ」によって構成されている。地球環境科学部地理学科では慣例的に学科主任（学科長）が「学修の基礎Ⅰ」（履修者数130人）を担当し、大学の学びや自校教育、施設・設備の利用方法、レポート作成法などの初年次教育を実施している。一方、学科専任教員が担当する「学修の基礎Ⅱ」は5クラスに分かれて少人数で実施され、グループディスカッションやプレゼンテーションなどのアクティブ・ラーニングを取り入れて、日本語作文能力を含むアカデミックスキルの向上を目的とするものである。

「学修の基礎Ⅰ」の授業内容については、過去の学科主任が作成した授業用スライドを参考にしつつ、微修正を加えながら改善を図ってきた。今年度はコロナ禍による未曾有の事態が生じたため、2020年度の授業を始めるにあたり授業実施順や授業内容を変更せざるを得なかった。学科会議において変更内容を協議したほか、新たな取り組みについては随時報告を行った。

2-1. 当初シラバス授業計画案

従来、「学修の基礎Ⅰ」の前半の授業内容は、ガイダンス内容の復習のほか、出席カードリーダーや図書館など、キャンパス内の施設利用案内に重点を置いてきた（表1）。また、4月下旬から始まる選択科目「地理基礎巡検」の内容やコースなどを説明し、本学科のカリキュラムの核となるフィールドワークに関する理解を深めさ

せてきた。また、本学は2014年度から6年間にわたって文部科学省「大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅠ：アクティブ・ラーニング」に選定され、地球環境科学部を中心に全学的に取り組んだ（小松・松尾2018）。この中のAプロジェクト「多人数講義科目でのタブレットを用いた双方向授業」に対応するため、タブレットの貸出および利用方法、および双方向授業アプリであるロイノート・スクールの使用方法などについて一連のレクチャーを実施してきた。

授業中盤では、大学での授業の受け方、ノートの取り方、試験の受け方、レポートの作り方のほか、GPAや成績評価基準などを説明することで、学期末に向けて学生が主体的に履修できるよう促した。高校と大学の学びの違いに戸惑う学生が多いため、スムーズに新たな学修スタイルへ移行することを目的として、これらの内容を設定した。

授業後半では、文献検索、グループディスカッション、学びのスキルの習得など、多様なアクティブ・ラーニングの方法を体験させてきた。とくに、地理学科は他学科に比べて控えめでおとなしいタイプの学生が多く、授業の理解度を高めるためには思考力や創造性を育むトレーニングが必要である。そのため、グループワークなどを通じたコミュニケーション力の向上が不可欠である。したがって、「学修の基礎Ⅰ」の授業内容は、4年間の学びをより豊かにし、かつ卒業後に社会人・大学院生として活躍するためのスキル習得を目指した。

表1 2020年度「学修の基礎Ⅰ」授業内容当初案

【第1回】	授業オリエンテーション、学びのしくみ（1）（単位・CAPとは：履修登録に際して知っておきたいこと）
【第2回】	学びのしくみ（2）（地理基礎巡検に参加する、キャンパスを使いこなす）
【第3回】	学びのスキル（1）（授業を聞く・ノートを取る）
【第4回】	学びのスキル（2）（タブレットPCを使用した双方向授業に参加する）
【第5回】	学びのしくみ（3）（GPAとは・授業改善アンケート・授業期間内における小テスト）
【第6回】	立正大学の歴史（1）（立正大学の「建学の精神」、石橋湛山先生）
【第7回】	立正大学の歴史（2）（地理学科の歴史と目標）
【第8回】	学びのしくみ（4）（専門を生かしたキャリア）
【第9回】	学びのしくみ（5）（地理学のフィールドワークとは）
【第10回】	学びのスキル（3）（文献・資料調査をする）
【第11回】	学びのスキル（4）（文献を読み、要約する）
【第12回】	学びのスキル（5）（グループで討論する）
【第13回】	学びのスキル（6）（発信する）
【第14回】	学びのスキル（7）（レポートの点検と評価）
【第15回】	まとめ（地理学とSDGs：持続可能な開発目標）

2-2. 実際の授業計画

2020年度はコロナ禍の影響で、ガイダンスや授業がオンライン形式で実施されたため、例年とは異なる新入生に対するフォローを取り入れる必要性が生じた。オンライン形式の新入生ガイダンスは、入念なシミュレーションを行い工夫したものの、十分に理解できない学生が存在する可能性もあったため、「学修の基礎 I」の中でフォローした。表2に示す通り、基本的には前年度までの授業計画や内容を踏襲しつつ、今年度必要な事項を取り入れるように再構成した。毎回の授業の中でシラバスの授業計画に示したメインテーマのほか、サブテーマとして修得すべき汎用的能力を明示することで、15回の授業内容をより幅広く効率的に実施するよう心掛けた。たとえば、建学の精神や三つのポリシー（DP、CP、AP）については、教養的科目と専門的科目の違いや必要性和合わせて解説した上で、サブテーマとして日本語作文能力の向上を図る課題を設けるなど、汎用的能力の修得における効率化を図った。また、立正大学の歴史を中心とした自校教育では、地理学を学ぶ上での空間と時間の概念の重要性を関連付けて講義を展開した。

本学では2020年度にオンライン授業を実施する科目については期末試験や期末レポートの代替措置として、毎回の小レポートやリアクションペーパーの提出を課した。そのため、小レポートの書き方を早い時期に修得できるように授業前半の内容に盛り込んだ。第1回から第3回までの授業では、短文から400字程度の日本語作文技術

の向上を目的としたプログラムを取り入れ、たとえ感想文であっても大学生レベルの文章作成を心掛けるように指導した。また、高校では学校ごとの教育方針や科目担当者によってノートを取り方もある程度決められているが、大学の講義科目ではノートテイクにおける自由度は高い。とくに、地理学やフィールドサイエンスの分野では、写真や動画を示しながら進行する授業が多く、高校で主体的にノートテイクをしていなかった新入生は漫然と受講しがちである。そのため、大学と高校の学びの質と方法の違いを説明しつつ、ノートテイクの方法を例示した。近年はインターネットで情報を収集することが一般化したため、膨大な蔵書を利用する機会が減っている。図書館の書籍を閲覧することでテクニカルタームを中心とした語彙力が増加し、より効果的にインターネット検索ができる点など、学生の視点で図書館利用の有効性を説いた。

第4回の授業では、文部科学省の掲げる「学士力」と経済産業省の掲げる「社会人基礎力」について自己評価する作業を課した。学生自身が自らの長所と短所を見つめ直すとともに、長所をさらに伸ばし、短所を少しでも改善する、あるいは長所をもって短所を補うためにはどのような大学生活を送ればよいかを再考させる機会を設けた。第5回には、地理学科の専門科目の概要やカリキュラム体系についての講義を行い、大学・学部・学科のカリキュラムポリシーに照らし合わせながら、理解を促した。

表2 2020年度「学修の基礎 I」オンライン授業下での授業内容

【第1回】	大学での学修
【第2回】	ノートの取り方
【第3回】	図書館やネット情報の活用
【第4回】	短所を補って長所を活かそう・建学の精神や三つのポリシー
【第5回】	地球環境科学部地理学科の専門教育
【第6回】	どのように大学生活を過ごすか__教員A対談
【第7回】	どのように大学生活を過ごすか__教員B対談
【第8回】	どのように大学生活を過ごすか__教員C対談
【第9回】	そうだ。留学しよう。
【第10回】	立正大学の歴史
【第11回】	大学をどう活用するか-学生生活・キャリアデザイン
【第12回】	批判的に読み解く力と読書
【第13回】	大学教育のしくみ：単位と成績
【第14回】	協働力 グループディスカッション
【第15回】	フィールドワーク・巡検

第6回から第8回では教員の対談動画を新たに作成し、かつて大学生であった先輩としての大学教員の体験談を学生に視聴させた上で、4年間の学生生活と卒業後の進路に結びつく経験について作文を課した。高橋（2014）は先輩の体験談を中心にディスカッションを行うピアサポート・プログラムが初年次教育で役立つと述べ、斎藤（2008）は教員の体験談も学生の学修意識の向上やキャリア形成において効果的であると論じた。とくに、2020年度はコロナ禍の影響もあり、教員や先輩、同級生とキャリア形成について語る機会が極めて少なく、サークルやアルバイトなどの課外活動を通じたコミュニケーションの機会も限定的である。そこで、対談形式により教員が学生時代を振り返る内容の授業用動画を閲覧することで、学生自身が「なぜ大学で学ぶのか」「どのように4年間を過ごすのか」を見つめなおす機会とした。

第9回では、本学国際交流センターが実施している留学や語学研修、地理学科2年次以上選択科目「海外フィールドワーク」の内容や参加方法を紹介したほか、その意義などについても解説した。同センターから資料提供を受け、奨学金や単位認定、留学にともなう4年卒業の可否などについて学生の不安を取り除くような講義を行った。留学制度が整っていても利用する学生数が減少しているが、本学科では今後4年間でより多くの学生に留学や短期語学研修を体験させたいと考えている。2020年12月現在、新型コロナウイルスの影響で渡航が難しい状況ではあるが、留学の勧めを継続する予定である。

第10回には立正大学の歴史、第11回には学生生活とキャリアデザインについての講義を行った。第12回の授業では、鳥津弘教授が主任であった2016・2017年度に導入した課題を活用し、文章や段落の構造を知るとともに批判的に読み解くトレーニングを行った。また、自然災害や防災に関する文章を読解し、ワークを通じて長文レポートの書き方を身に付けさせた。第13回の授業では、新入生ガイダンスで説明した単位取得や成績評価の方法について再確認を促した。

第14回ではZoomを用いた双方向授業を取り入れ画面越しに対面しながら、新入生ガイダンスで行うことができなかつた学科教員紹介を実施した。その後、2期に開講される「学修の基礎Ⅱ」のクラスごとに分かれて担任教員や学生の紹介を行った。さらにクラス内で4～5人程度のサブグループを作成し、グループディスカッションを実施した。自己紹介のしかたや議論するテーマについては3週間前から学生に告知し、時間を有効に使うだけでなく初対面の学生同士の会話が円滑に進むように

ワークシートを準備した。グループディスカッションの主なテーマは「オンライン授業を受ける上での工夫」である。これは教員のみならず新入生にとっても最大かつ共通の悩みであるために会話が弾み、他者の意見を参考にして受講のしかたを見直す授業として設計した。第14回の授業の実施に際しては地理学科教員だけでなく、教務補助員やSA（スチューデント・アシスタント）にも協力を仰いだ。とくに「学修の基礎Ⅱ」と「基礎地図学および実習Ⅰ」の担当教員には、クラス別のディスカッションの進行役を務めてもらった。

第15回の授業では、本学地理学科教員等が執筆した『地理を学ぼう 海外エクスカッション』（鳥津ほか2019）の一部を教材として、フィールドワークや巡検について解説した²⁾。また、今年度は変則的に2期に集中的に実施することとなった1年次選択科目「地理基礎巡検」³⁾の趣旨と全14コースを紹介した。

2-3. 新入生の持つ不安

前述の通り、本学では1期授業が5月13日水曜日から開始され、5月19日火曜日に「学修の基礎Ⅰ」の第1回授業が行われた。授業課題の一つとして、Microsoft Formsを用いて「今年度のオンライン授業が始まって、一週間が経過しました。あなたの履修状況、オンライン授業への対応、感想などを教えてください」という自由記述形式の質問をしたところ、再履修学生を含む回答者122名中89名（73.0%）が「順調に受講している」「不安だったが慣れてきた」と回答した。一方、不安を訴える学生は「出席や課題提出が正しくできていないかわからない」「PCの操作に慣れない」「インターネット接続が不安定で映像が途切れる」などをその理由として挙げており、学科もしくは教員個人で対応してきた。「友人とコミュニケーションができない」ことに対する不満を記述する学生も3名いた。

学生の不安や履修上の問題を解決するために、「学修の基礎Ⅰ」での対応だけでなく、地理学科として組織的に新入生に対するフォローアップを実施してきた。その結果、第13回目の講義で1期履修科目全体について振り返りを行った結果、概して授業回数を重ねるにつれて受講に慣れてきて不安が解消されたと回答する比率が高まっていた。しかしながら、友人がいないためにちょっとした疑問を相談できずに困惑する様子もうかがえた。

3. 教員へのインタビュー動画作成

3-1. 事前ヒアリングシートの作成

インタビューに先立ち事前ヒアリングシートを用意し、対談プログラムに参加する教員3名が回答した(表3)。事前ヒアリング内容は、プロフィール、生い立ち、中学・高校、大学生活、進路、振り返りの6分野に大別した。学問に関する事項だけでなく、幼少期の性格やエピソードなど、一人の人間として親近感を覚えるような質問項目も設けた。また、大学入学前と大学入学後の話を核として、卒業後の進路を決める過程やきっかけなども

伝わるようにした。

事前ヒアリングシートの回答をもとにインタビュー内容をあらかじめ構成し、対談を行う3名の教員で意見交換を行って各教員に対する質問項目を抽出した。また、他の教員と重複する内容や長い説明を要する話題は削除した。一方で、教員の個性や経験が活きるよう、重要な点は質問項目として取り入れ、インタビュー時間が30分程度で収まるシナリオを立案した。そのため、今回の対談は各教員の側面を述べたに過ぎず、これが伝えたいことのすべてではないことを事前に学生に伝えた。コロナ禍で対面授業が中止されたため、対談はライブ感が伝

表3 教員向け事前ヒアリングシート

大分類	質問項目
プロフィール	お名前を教えてください
	出身地はどこですか
	出身大学と学部を教えてください
	現在の専門分野は何ですか
	今年度は何に取り組んでいますか
	最近のささやかな楽しみは何ですか
生い立ち	どんな子供でしたか
	どんな家庭でしたか
	当時楽しかったことは何ですか
	当時集めていたものはありますか
	子どものころで記憶に残っている風景はありますか
中学高校時代	部活動に熱中しましたか
	高校生になって心境の変化はありましたか
	志望する大学・学部・学科をどのように選びましたか
大学時代	入学後の学びは満足できるものでしたか
	入学した時どんな気持ちでしたか
	授業に対して真面目に取り組んでいましたか
	影響を受けた授業はありますか
	1・2年生のころ、研究室を訪れていましたか
	図書館を利用していましたか
	部活動やサークルに所属しましたか
	アルバイトから何か得ましたか
	空き時間をどのように過ごしましたか
	休日はどうのように過ごしましたか
	影響を受けた友人はいますか
進路	1・2年生のころ、どのような進路を考えていましたか
	大学で学ぶことと進路が結びついていましたか
ふりかえり	後悔していることはありますか
	当時の自分を褒めてあげたいことは何ですか
	大学生の間に培われた能力は何ですか
	「大学」とは何を学ぶところと思いますか
	学生へのメッセージをお願いします

わるように演出し、一字一句読み上げるような原稿を作成せず、大まかなシナリオに沿うようにアドリブを交えて笑顔で対談するよう心掛けた。

新入生にとって大学教員は遠い存在であると考えられがちであるが、大学1年次から学問を究めていたわけではない。専門科目や教養科目の学びをはじめ、図書館の利用やサークル活動、課外ではアルバイトをはじめとする多様な体験を通じて、人格形成・キャリア形成がなされてきた。その学びのプロセスを知るためには、教員をはじめ同級生や先輩との会話が効果的であると考えられるが、コロナ禍の影響で同級生や先輩と話をすることが極端に少ないのみならず、人と会う機会もほとんどない状況を考慮して、動画のコンセプトを「かつて学生だった教員が、一先輩として学生時代を振り返り新入生にメッセージを送る」とし、受講生自身の指向や体験をもとに自由に考えを記述する課題を課した。

3-2. 教員の経歴や特徴を生かしたトピック

地理学科の学生は、地理学の全体あるいはその一部に関心をもって入学した学生と、文系学科／分野の一つととらえて入学した学生に大別される。前者のように専門科目に関心がある学生であっても地理学の分野は多岐にわたるため、自然地理と人文地理などの系統地理の中の特定のテーマや、特定の地域にのみ関心が偏っている場合も少なくない。そのため地理学科教員の多くは、入学早々一つのことしか興味を持たない学生に対して、広く学問分野全体に興味を抱いてほしいと願っている。また、高校卒業までに、学びたいことを絞ることができなかった学生に対しては、本学地理学科の間口の広さを最大限活用して自身の関心のあるテーマを考えるよう指導している。対談を通して、教員自身の専門分野を絞り込んだ理由やきっかけを伝えることを主眼の一つとした。

4年間の大学生活は、授業やゼミを中心に、部活動やサークル活動、友人との交流、アルバイトや就職活動など多岐にわたり、学内外のあらゆる活動が豊かな人間形成やキャリア形成につながる。コロナ禍の影響で自宅に閉じこもりがちになる新入生に、可能な範囲でコミュニケーション力や行動力を磨く努力をするよう動画を通じて促した。

3-3. 教員対談動画の撮影

動画撮影にはGoPro HERO8を利用した。聞き手と話し手が対面するアングルで撮影し、動画の修正や字幕挿入などの編集作業は行わず、教員対談の臨場感を残す

ようにした。ファイルはmp4形式で、画素数を852×480サイズに圧縮変換した。動画の時間はいずれも20分前後である（表4）。立正大学で契約しているMicrosoft社Office365のアプリの一つであるStreamを用いて学内限定で動画を配信した。このアプリは他の科目でも利用頻度が高く、学生・教員ともに比較的慣れている。

第6回から第8回ではいずれも「教授の対談内容を聞いて参考になったことや、あなたの今後の大学生活と照らし合わせて考えたことを、200～300字で述べなさい。『ですます調』で書いてください」という課題を課してOffice365のFormsアプリで提出させた。提出期限は3日後の金曜日とした。本科目では日本語作文能力の向上が目的の一つであるため、「過去の授業で行った振り返りでの添削を参考にして、不要な文言を極力避け、大学生としての日本語能力水準に照らし合わせて字句を選ぶこと。また、文章構成にも配慮すること」と注釈も付した。また、第8回は本単元の最終回に相当するので「第6、7、8回の対談では、三者三様の点もあれば類似点もありました。3名の教員対談を通して、多様な考え方や生き方、あなたが改めて考えた事、新しい発見などを小論文としてまとめてください。多様な人からヒアリングすることの意義を取り入れても良いでしょう。字数の設定は200～400字とし、『である調』で書いてください」という課題を追加した。

4. 対談内容

今回、対談した教員3名のプロフィールと対談で取り上げた内容を表5に簡略化して示した。教員の対談では、教員自身の成功体験に基づく提案と、後悔に基づく提案の二つに大きく区分される。

4-1. 教員Aのケース

教員Aは地理や歴史に興味を持ち大学に入学したが、当初は研究者を目指すわけでもなく、高校教員になる将来像を漠然と持っていた。「授業への出席などは必ずしも褒められるものではなかった」が、上級生のゼミ室に立ち寄り手伝いをする中で、研究をはじめとする多様な刺激を得ることができた。さらに、野外実習やゼミ巡検などを通じて歴史地理学の分野へ傾倒していく。時間を上手に使い分けることで学びと遊びの両立に腐心すると同時に、アカデミックな興味や関心を追求した。学部生時代の内的要因のインパクトが大きく、一つのことを究める研究者の世界に没頭する機会を得た。対談では、よ

表4 3回の対談内容

授業回	話し手	聞き手	撮影者	分析対象者数	動画時間 (m:s)	学部時代の専門
6	教員A	教員C	教員B	101	17:48	歴史地理学
7	教員B	教員C	教員A	99	22:15	地域文化
8	教員C	教員B	教員A	96	22:35	総合理学

分析対象者数はFormsによる回答者数とした。強化クラブ生を除く。

表5 対談した教員のプロフィール

	教員A	教員B	教員C
高校時代の大学進学基準	入学後に地歴科目から専門を広く選べること	国際関係・国際協力など海外について学べるカリキュラムがあること	入学後に情報や物理などの分野を選択できること
1年次の授業への取組姿勢と当時考えていた進路	必ずしも褒められる学生ではなかった。周りの学生と同じく、高校教員を漠然とイメージ	関心の有無により、姿勢がはっきりと異なる。英語を使う仕事	規則正しく、まじめに受講。理工系だったので、愛知県の自動車メーカーの技術職を軽くイメージ
学生生活	図書館のラウンジなどで友人と過ごす日々	学内・インカレの両サークルに所属しつつ、片道1時間半の電車通学	平日は毎日アルバイト、休日はサークルの仲間と山や海へドライブ
影響を受けた人	ゼミの先輩	国内外で出会った外国人	友人の友人など、幅広い人脈
現在の学問分野につながるきっかけ	1年次に歴史地理学実習を自ら選択して巡検に参加し、院生室で先輩から受けたアドバイス	ホームステイで自分の英語が通用しないことを知る。就職活動や卒業後のキャリア、途上国の人とかかわる過程で、興味や目標が変化	2年次後期の演習で、地形図一枚から自然の成り立ちを深く読み取れることを知って感動
対談内でのキーワード 新入生へのメッセージ	学生時代には無限に感じる時間だが、上手にチャンネルを使い分けて有効に使ってほしい	学生のうちは失敗が失敗にならないので、様々なことに挑戦してほしい。就活では、やりたいことだけではなく、やってきたことをアピールすると良い	視野を広く持ち、あらゆる経験や行動することが、いつか将来につながる。早い時期に海外を経験しよう

り良い時間の使い方ができたのではないかと遠い目で語っている。

4-2. 教員Bのケース

在学中にはインターカレッジサークルなどに籍を置き、様々な考えや背景を持つ人に接してきた。好きな語学の力を磨くべく米国でホームステイも経験したが、そこで机上で学ぶ語学力の限界を知る。また、大学卒業後の進路選択で満足することなく、継続的に英語力を身に付け、かねてより希望していた途上国支援にかかわる職を得た。学生時代には「失敗が失敗にならない」という気持ちで学生にチャレンジすることの大切さを伝えた。そうした実社会での具体的な経験が、自身の大学院進学や現在の研究分野に対する関心の高まりへと結びついている。学生時代には、興味や関心の高低によって受講意欲に差があったため、教養的科目の学修も疎かにしなければよかったと振り返っている。

4-3. 教員Cのケース

教員Aと教員Bの対談がゼミや授業などの学問を中心とした内容であったため、課外活動を通じて視野を広めた話を中心に構成した。高校までは情報科学や物理学、天文学に興味があり、大学入学後に関心のある分野をさらに絞り込むつもりだった。しかし、授業での学びを大切にすることで、読図の授業に感銘を受けて進路を変更した。学生生活を継続するためにはアルバイトが必要で、多い週には9つのアルバイトを掛け持ちしながら、日中は卒業研究のための実験や調査・分析を行い、深夜に大学院進学の勉強をした。スケジュールを細かく立てることで規則正しい生活を送ることができたのであって、もともと自律できる学生ではなかったと振り返っている。また、卓越した行動力やコミュニケーション力を有する友人から多大な影響を受けた。自動車を手に入れたことが、山や海の自然を知るきっかけとなり、結果的に自然地理学的視点を養うことにつながった。授業だけでなく、

経験や人間関係などの外的要因のインパクトにより地理への興味を深められたが、学部生のうちに海外旅行を経験しておけば良かったと、のちに後悔した。

5. 学生の回答

地理学科教授という肩書であれば、これまでの経歴や境遇が類似していると新入生は想像しがちである。しかし、実際には現在に至るまでのプロセスが大きく異なる。かつて大学生であった教員の体験談には時代背景の違いも見られるが、一人の先輩の話として対談に耳を傾ける様子が回答から読み取れた。一方で、学生の反応にもいくつかのタイプがみられたので、以下に回答例を分類して示す。

1) 教員の成功体験を参考にするタイプ

自分の欠点に対して新たな自己発見があり、教員の成功体験を積極的に取り入れようとする学生がいた。回答として、以下の例が挙げられる。カッコ内の記号は話し手を示す。「1年次からフィールドワークに参加し、先輩たちとの交流を深めていた教授のように、私も先輩との交流を深めていき、様々なアドバイスを頂けるような関係になりたい (A)」「バイトを週に9回も入っていたことがとても驚きました。しかし、そのおかげで逆に規則正しい生活もできていたということを知り、そういうやり方もあるのだなと参考になりました (C)」「時間を決めて行うことでスケジュールをこなしやすいことも今回の対談で学びました (C)」「転職をしたそうですが裏を返すと英語ができる分、転職に有利だったと推測すると英語の重要性を改めて感じました (B)」。一方で、教員対談の内容に共感しつつも同じようには行動できないとあきらめる回答はみられなかった。ただし、回答方法が匿名記述式であったなら、結果は異なった可能性もあることに留意したい。

また、「必ずしも自分の就きたい職業に初めから就職できるわけではなく、学び直したり、別のところに就職したりする中で (も)、自分が専門的に学んできたことだけが活きる場面は少ない。(中略) 経験の浅い私が興味のあることだけを学んでいても、視野が広がらないように思えた (中略) 幅広い教養を身に付けたい (B)」「教授が通訳の仕事をしていた時にフィリピンに興味を持ったように、どんな学びの転機が、仕事の転機が起こるか分からないため、基礎や教養を深め、大学生活を送っていききたい (B)」といった回答のように、教員の

言葉を自分の経験や考えと照らし合わせて具体的に論述できている学生もいるが、その割合は高くなかった。2年次以降、自身の言葉で発言できるような指導が必要であろう。

2) 共通点や相違点に注目するタイプ

学生の置かれている状況や現時点での考え方と、教員の対談内容が共通する点に共感した学生が多かった。「アバウトな目標を持っただけで大学に入学したという言葉に安心しました。自分も今まさに同じ状況です (A)」「今は何がしたいのかわからず、大学に入ってから決めようというのは僕と全く同じであった (C)」など、とくに学びたい分野が定まっていない場合や、進路が決まっていない場合によく見られた。

反対に、学生自身の行動や性格と、教員の体験談が異なる点に注目した学生もいた。「僕自身が内向的であるため興味をもって外に出る先生は素晴らしいと思います (B)」のように尊敬や憧れの思いを記述した学生の行動変化に及ぼす影響は現時点では不明であるが、大学生活を通して新たな自分の一面を発見することを願う。

3) 対談内容の細部にまで注目するタイプ

塾講師のアルバイトを行った時の指導法など、対談の細かいエピソードに共感した学生もいた。たとえば、「今つまづいてるところだけでなく、つまづいてる場所を遡って教える (C)」など、話題の枝葉部分が印象に残った学生がいたことは、対談動画の細部にまで注意を払って聞いている学生の存在を示しており、教員の言葉が一字一句学生の心に刺さることを再確認できた。

4) 趣旨の理解不足および一般論として記述するタイプ

「幼少期に、お笑い番組や漫画が大好きだったことにとっても共感できます (C)」のように、教員の生い立ちや幼少期のエピソードのみに共感した学生は、今回の授業の趣旨を理解していない事例といえる。一方、趣旨は合っているものの「一つのことだけではなく、多くのことに興味や関心を持つことが大切だと感じました (C)」など、具体性に欠ける回答も散見された。自らの経験や体験と十分に照らし合わせることができず、自分自身の言葉に落とし込めないために、一般論としての感想で終わってしまうのではないだろうか。読解力が高く、いわゆる「正解」を求める優秀な学生にみられる傾向であるので、キャリア形成の上でも一歩踏み込んだ思考力を修得させる指導も必要である。

6. 学生の回答の語彙から見た傾向

樋口 (2014) や末吉 (2019) を参考にして、フリーウェアであるテキストマイニング・ツールKH Coderを用い、提出された回答を教員ごとに頻出語分析を行った (表6)。名詞のほか、形容詞、形容動詞、動詞を中心に分析した。分析の事前処理として、学生の回答した文章をすべてチェックして、明らかな誤字については修正した。なお、地理学科には強化クラブ生 (サッカー部員) が毎年度15名前後在籍しており、サッカーに結び付けた回答が多くなることから、頻出語分析からは除外した。

「挑戦」「チャレンジ」という語句は教員Aと教員Bにおいて出現頻度が高かった。また、教員Bでは「失敗」に関する記述が多い。これは教員Bの動画の中で述べられた「学生時代の失敗は失敗にならない」という言葉に対応していると考えられる。教員Cはアルバイトや友人との交友関係を広げる身近な内容について述べていたため、挑戦する要素が少なかったのだろう。

「先輩」「後輩」という語は教員Aに対する回答で多く

みられ、研究室や実習を通じたアカデミックなつながりが印象に残ったものと推察される。同様に「学問」「没頭」などの語も教員Aの回答で多かった。「専門」「研究」については教員Bで多いが、専門科目について記述した例も含まれる。地理学科では研究を推進する上での核となる、先輩と後輩を結び付けるゼミがあるものの、実際に共同作業するような場所が設置されていないため、本学科における今後の課題といえる。

「時間」「時代」などの語は教員Aで突出して多く現れており、「有限」「無限」「オン」「オフ」(英単語を含む)「切り替え」などの語とともに記述されている例がみられた。これらに関連して「将来」「今後」といった将来設計に関する記述につながっている。一方で、「今」「現在」という大学1年次における考えや記述は、教員Aだけでなく教員Cでも多く現れており、今すぐできる行動と関連付けられている。

「アルバイト」「バイト」をはじめ、「サークル」「旅行」などの課外活動を示す語はいずれの教員でもみられるが、教員Cにおいて頻出していた。例年に比べて課外

表6 学生の回答に見られる頻出語

語句	教員A	教員B	教員C	語句	教員A	教員B	教員C
挑戦	30	32	13	行動	14	11	29
チャレンジ	44	48	9	積極	17	12	36
失敗	3	103	0	経験	14	92	33
先輩	32	1	2	交流	6	2	14
アドバイス	11	6	9	海外	2	18	68
背中	5	0	0	外国	1	9	1
参考	23	15	26	国際	0	4	0
学問	16	2	1	国外	0	2	1
研究	7	9	3	国内	2	1	13
専門	4	15	2	留学	1	17	1
没頭	10	0	0	ホームステイ	0	5	0
時間	213	15	53	英語	2	31	3
時代	33	29	20	語学	0	2	1
今	67	35	62	言語	0	4	1
現在	10	6	16	教養	2	33	0
将来	39	34	21	キャリア	7	5	4
今後	23	14	13	規則正しい	0	0	41
アルバイト	5	19	40	幅広い	6	26	3
バイト	5	10	36	強い	5	8	3
サークル	9	0	12	さまざま・様々	22	38	27
旅行	7	3	18	いろいろ・色々	11	26	13
ボランティア	2	13	2				

教員A、B、Cの回答数はそれぞれ101名、99名、101名。

活動が大幅に減少しており、「行動」「積極」などの頻度とも関連して学生の潜在的な希望が垣間見えた。また、課外活動の中の「ボランティア」については教員Bの体験談に結びつけて述べた学生が多かった。

「留学」「ホームステイ」「外国」「国際」「国外」などの語は教員Bの回答に多く見られ、比較的長期にわたる留学に関する考えについて触れているほか、国際的な視野を培うための学修について述べられている。そのため、「英語」「言語」「語学」といった語も併用され、外国語を得意とする学生の高いモチベーションだけでなく、不得意な学生にとっての言葉の壁の大きさを感じた。一方で、「海外」の語は教員Cの回答で半数以上が用いており、旅行を含む広汎な海外での体験に関して記述していた。

授業やアルバイトの予定を詰めこんだ体験から「規則正しい」「すごい」、多様な途上国の人々との交流のエピソードから「幅広い」などの形容詞も良く使われていた。

7. 三人の比較 総合まとめ

学生の記述式回答やその中に含まれる頻出語の解析から、教員対談の内容を通じて学生自身に置き換えて深く思考した学生が多いことが分かった。さらに、教員の対談内容と学生の回答に見られた頻出語が一致していたことから、各教員の意図は概ね正確に伝わったと考えられる。また、今回は強化クラブ学生の回答を除いて分析したが、学問を研鑽する上での体験談から、サッカー選手

としての目標に置き換えることができていたことを付記しておく。

最後に、毎回の授業終了後の回答とともに、学生が授業内容を5段階評価した結果を示す（図1）。「とてもよかった」「よかった」を選択した学生の割合は、教員A、B、Cにおいてそれぞれ100%、95%、96%といずれも高評価だった。教員Aの対談内容は学問的興味やゼミで活動するストーリーであるにもかかわらず、肩ひじを張らず受講学生に寄り添う内容であったことや対談初回であったことも影響している可能性がある。一方で、教員Bや教員Cの対談内容は、ホームステイや途上国での体験、週に9つのアルバイトをしてもすべての授業を出席したことなど、コミュニケーション力や英語力のほか、体力に不安のある学生には、精神的にハードルの高い内容だった可能性がある。

「原因を追究すること」を重要とした回答のように、対談中には述べなかった語彙を使っている学生は、対談中の言葉に惑わされず、学生自身の言葉で深い学修成果を振り返っていることが示唆される。今後は、対談内容を踏まえたうえで、自分自身の言葉で記述することをあらかじめ学生に伝え、その上で課題を与えるなどの工夫が必要と考えられる。

8. まとめ

コロナ禍の影響でリアルな大学生活を送れない新入生に対し、初年次教育の一環として大学教員の学生時代を

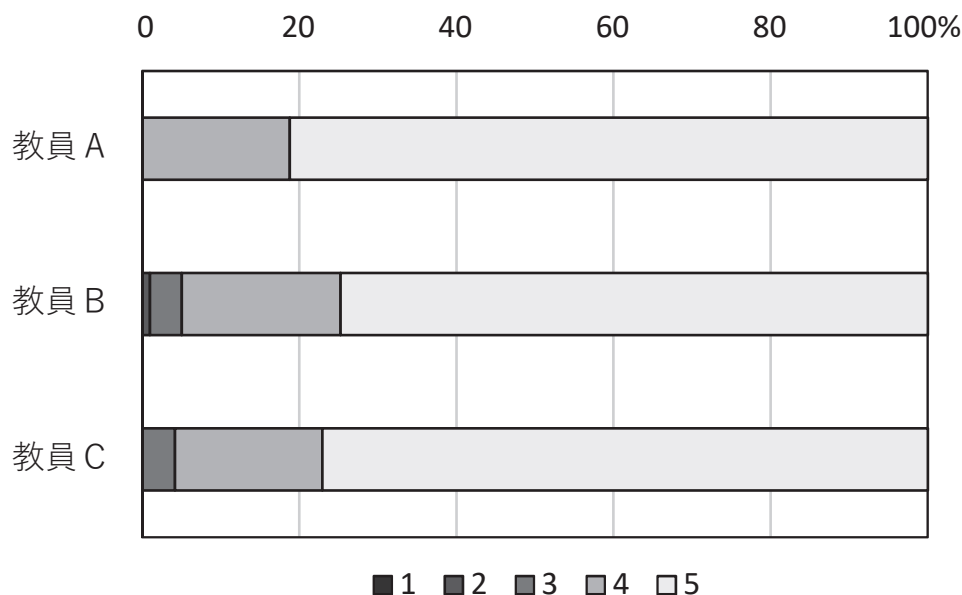


図1 授業の「内容」に対する総合的な評価

1：とても悪かった 2：悪かった 3：どちらともいえない 4：よかった 5：とてもよかった

振り返る対談動画を用いて、学生生活を有意義に過ごすための参考とする授業を行い、記述式回答から学生の思考や信条の一端をテキストから読み解いた。

教員が学生時代の悩み、不安、葛藤、学問への興味、学生生活、進路選択などの経緯を具体的に伝えることで、オンライン授業にライブ感を持たせた。記述式の課題からは、学生の意欲の変化や将来計画を再考する効果がみられた。今後は、地理学の専門性をさらに深め、積極的に行動を起こす人材を育成できるような組織的バックアップが必要となるだろう。

謝辞

「学修の基礎 I」の授業内容を作り上げた歴代の教員に感謝申し上げます。また、匿名査読者からは有意義なコメントを頂いたので感謝いたします。

注

- 1) 大学からのお知らせや、学修に関する様々な情報を得るための、学内限定の学習支援システム。
- 2) 本書は2019年度および2020年度新入生全員に配布している。
- 3) 本科目は1期・2期ともに8コース、合計16種類の日帰り巡検プログラムから構成され、学生が自由に選択できる。いずれのコースも事前・事後指導を実施しており、巡検の準備やレポートの書き方などを学ぶ。2020年度はオンラインで事前事後指導を実施した。

引用文献

- 小松陽介・松尾忠直 2018 立正大学地球環境科学部におけるアクティブ・ラーニングの導入と教育改革の進展. 地球環境研究, 20, 43-55.
- 齋藤 誠 2008 初年次教育としての「大学生活入門」—法学部における実践報告—. 東北学院大学教育学研究所報告集, 8, 5-22.
- 島津 弘・伊藤徹哉・立正大学地理学教室 2019『地理を学ぼう 海外エクスカッション』朝倉書店, 104p.
- 末吉美喜 2019『テキストマイニング入門 ExcelとKH Coderでわかるデータ分析』オーム社, 221p.
- 高橋伸子 2014 大学生のピア・サポートプログラムに関する一考察—流通経済大学社会学部初年次教育における新入生支援の事例から—, 流通経済大学社会学部論叢, 25(1), 57-75.
- 樋口耕一 2004 テキスト型データの計量的分析. 2つのアプローチの峻別と統合. 理論と方法, 19, 101-115.
- 厚生労働省ホームページ 新型コロナウイルスの更新情報 https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/topics_shingata_09444.html 【最終閲覧日2020年12月3日】
- 首相官邸ホームページ 新型コロナウイルス感染症対策本部 https://www.kantei.go.jp/jp/singi/novel_coronavirus/taisaku_honbu.html 【最終閲覧日2020年12月3日】
- 立正大学ホームページ <https://www.ris.ac.jp/> 【最終閲覧日2020年12月3日】

Initiatives taken for the first-year experience and effects of video interview by faculty members on career development under the COVID-19 situation

KOMATSU Yosuke*, KAINUMA Emi*, and OKAMURA Osamu*

* Faculty of Geo-Environmental Science, Rissho University

Abstract :

First-year experience is positioned as an important subject for leading and encouraging freshmen to launch smooth university life. This study examined whether it is possible to improve students' motivation to study and produce curricula plans by showing the interview video on faculty member experiences.

Most of the classes started as online learning in FY2020 due to the COVID-19 in Rissho University. This situation forced freshmen to undergo their campus life without learning with new friends or from seniors at university who can usually give advice on what to learn, what are the purposes of studies, and about extracurricular activities.

In the "Introduction to Fundamentals of Academic Works I" course, three interview videos on own student days of three faculty members were recorded and showed to new students for three consecutive weeks through the Internet. After viewing, the students submitted review sheet with free response. Results of word frequency analysis using text mining (KH Coder) of the sheets from total 296 students showed that the messages of each faculty member were mostly matched to what students wrote. These videos guided the students to establish their own target and goal of their four-year university life. This new attempt may be applied to other subjects to encourage students to keep up motivation to study even when face-to-face learning is difficult.

Key words : first-year experience, COVID-19, interview, text mining, career formation